

茨城県大子町と「地域と教育」研究会の連携に向けた調査報告（2）

橋田 慈子*
吉田 達朗**
小林 賢司***
酒井 大二郎****
森 芸恵*****

第1回学習支援活動

2011年7月21日～25日

7月21日（木）午後 黒沢小学校 12:30～15:00 参加学生：8名 ・統計グラフの作成／施設見学
7月22日（金）午前 黒沢小学校 8:00～10:45 参加学生：4名 ・「学びの広場」のサポート さほら小学校 8:00～11:00 参加学生：4名 ・「学びの広場」のサポート／夢道場の手伝い
7月22日（金）午後 上小川小学校 13:10～14:40 参加学生：8名 ・学力向上研修（筑波大学付属小学校 中田寿幸先生）
7月23日（土） 大子町散策 ・袋田の滝 ・月待の滝 ・ふるさと山田農園 ・Cafe'遊森歩～ユーモア～（ログハウス）等
7月24日（日） さほら小学校 ・のびっ子園で野菜収穫 ・販売準備（袋詰め、値段決め）、 道の駅奥久慈だいにて農産物販売
7月25日（月）午前 さほら小学校 ・「学びの広場」のサポート 黒沢小・中学校 ・「学びの広場」のサポート
7月25日（月）午後 だいご小学校 ・ポータルサイト運用・活用研修会

I はじめに

私たち筑波大学「地域と教育」研究会は、2011年7月21日から25日までの5日間にわたって茨城県の北西部に位置する大子町の小学校で学習支援活動を行った。

* 筑波大学人間学群教育学類2年
** 筑波大学人間学群教育学類3年
*** 筑波大学人間学群教育学類3年
**** 筑波大学人間学群教育学類3年
***** 筑波大学大学院修士課程1年

II 活動の目的

本活動は、筑波大学と大子町の協力推進である「学力向上推進事業」の一環である。本活動の目的は、大子町の小学生が大学生との交流を通して多様なものの見方を知ることや、体験学習を通して学習に対する興味関心を高めることである。

III 活動の内容

活動を行った期間が夏休みであったこともあり、黒沢小学校とさほら小学校では「学びの広場」と呼ばれる算数の夏期講習が行われていた。また、両小学校において「統計グラフ」の作成が行われており、大子町全体として算数に関する学力の向上に力を入れていることが分かった。

そして、さほら小学校における特色ある行事の一つである「夢道場」に実際に参加することで、この活動が子どもだけでなく地域や私たち学生にとってどのような意味を持つのか、そして、これからどのようにすればより良くなるのか、「夢道場」の可能性について考察をする。

IV 学習支援活動についての考察と今後の課題

i) 黒沢小学校での学習支援

7月21日と22日に黒沢小学校へ赴き、統計グラフや「学びの広場」のサポートを行った。

7月21日の午後に行われた統計グラフの講座で4年生の児童（9名）はいくつかのグループに分かれて作業を行っていた。講座を担当する

教師は一人であったため、計算につまずいてしまう生徒に対しては各グループに配属された大学生や大学院生が、丁寧に計算やグラフのデザインのアドバイスなどを行っていた。教師は児童の様子を概観し、必要があれば指導を行っていた。その結果、多くのグループがその日のうちに統計グラフの下書きを終わらせることができた。

7月22日の午前中には、黒沢小学校の全学年で「学びの広場」と呼ばれる夏期講習が行われた。「学びの広場」を手伝った大学生・大学院生は4名であった。私の担当した小学校4年生の児童たちには個別に算数の計算問題のプリントが課されていた。9名の児童に対して、教師は2名居り、学習支援員の私を含めると3名の教師・学習支援員が居るという状況であったため、児童の学習進度の差にも臨機応変に対応することができた。

これらの活動を通して見出された課題としては、グループ学習や個別学習を行う際に教師以外の学習支援員の人数を確保する必要があるということがあげられる。今回の活動においては大学生や大学院生のきめ細かなサポートが「統計グラフ」や「学びの広場」の講座のスムーズな進行に寄与した部分も大きかったであろう。しかし、普段の授業でグループ学習を行う際には教師一人が子どもの進度に合わせて指導を行っていかなければならないため、教師以外の学習支援員を確保する必要がある。学習支援員は、子どもの学習の理解度や進度を把握し、教師よりも児童にとって身近な存在であると、児童も学習に関する質問をしやすいだろう。

現在、黒沢小学校では同じ地区にある黒沢中学校から「学習支援員」の代わりに中学生を迎えることもしばしばである。しかし、現状では中学生による学習支援も一時的なものにとどまっており、継続的なものではない。今後はどのようにして大子町のような過疎化の深刻な地域で継続的に学習支援を行う者を確保するかが課題である。

ii) さはら小学校での学習支援

7月24日、「夢道場」のメインイベントである販売活動を昨年度に引き続き行った。今回の活動で筑波大学からは、23日6名、24日8名、25日8名が参加した。販売日の午前中に野菜を収穫し、袋に詰め、値段を決めていった。学校の畑で作った野菜は全て無農薬である。また、野菜だけでなくマリーゴールドなどの花も、売るために用意されていて、児童は「その野菜は新鮮で量が多いので、絶対売れる」と言って張り切っていた。児童はあらかじめそれぞれの仕事の長が割り振られていて、値段を決める仕事、野菜を取る仕事、そして、全体を取り仕切る「社長」という役割もあり、1つの会社に見立てて作業を行っていた。そこでの作業が終わると、「道の駅奥久慈大子」へ移動し、その一角を借りて商品を並べ販売活動を開始した。暑い中保護者も見守りながら、野菜はわずか1時間で完売した。教師によると、この道の駅での販売作業で得た利益は学級で使う用具や次年度の種子の購入費等に利用するということだ。この取組の内容はすぐに大子町ポータルサイトに掲載されていた。

このさはら小学校における「夢道場」の取り組みの特徴的な点は、野菜を収穫するだけでなく、それを販売するところにあると私は考える。他の小学校を見渡せば、学校で野菜を栽培して収穫し自分たちで料理するということは珍しくもない。だが、収穫をしてから自分たちで値段をつけ、外部に販売するという取り組みはなかなか無いように思う。その販売までの過程には色々な面倒がかかるだろう。しかしそうすることにより、子どもは生産者の苦労や、野菜の値段がどのように付けられているのか、どのような工夫がされているのか等、様々なことを経験を通して学べると思う。また、販売活動を通して人との関わり方も同様に学べ、それが学校と地域のつながりを生むことも期待できる。今回行った道の駅での販売だと、大子町の外部からの観光客も訪れるため、普段その外部の人々と関わるのが少ない大子町の子どもたちにとって大きな刺激となりうるだろう。大子町のポー

タルサイトもうまく活用されていて、外部の方々知ってもらう努力はできていただろう。ただ、今回の取り組みでは、教師が主導となり、児童の長を動かしているように見えた。値段をつけるとなると、色々な知識が必要になる。販売時の言葉使いも、やはりまだ小学生という感じで、大学生や先生から指摘されながらの販売となっていた。あらかじめ販売作業にかかわることを学んでおけば、より子どもの主体性を活かしたより良い取り組みとなるだろう。そして、ポータルサイトに関しては大子町を知ってもらう努力をこれからも続けていってほしい。

V 小括

私は、大子町という地名を「地域と教育」研究会で初めて知った。しかし、初めての様子への訪問で、豊富な自然や、大子町にしかないものを活かした観光スポットが多くある場所だと感じた。この大子町は東京からでも車で3時間弱あれば到着する。これから先、大子町は大きな可能性を持っていると思った。より多くの方々に大子町を知ってもらうことは、大子町の方、観光客双方にメリットがあるだろう。子どもたちにとっても多くの出会いがあることで成長ができるし、また、大子町の外の世界を知ることが出来る。したがって、この大子町を知ってもらうために、情報をより発信して欲しいと考えた。そうすることが、少子化や高齢化などの課題を抱える大子町の活性化のための一つの手段になるのだと思う。

(橋田慈子・吉田達朗)

第2回学習支援活動

2011年10月5日～11月2日の水曜日

I 活動概要

i) 日時

活動の日は以下の通りである(括弧内は参加人数)。

10月5日(2名)、12日(2名)、19日(2名)、26日(4名)、11月2日(4名)の第6校時、15時10分から16時まで。

ii) 目的

大子町と筑波大学の連携プロジェクトの一環として、学校教育の場で大学生がどのような役割を果たすことができるのかを探ること、また大子町の生徒に対するコミュニケーションの多様化を図ること。

iii) 活動内容

① 活動について

今回の活動は、大子町立黒沢中学校における総合的な学習の時間を支援するものであった。私たちは第1学年の支援を中心に行った。第1学年の総合的な学習の時間は黒沢中学校の文化祭である秋香祭(11月5日)での発表のための調べ学習の時間であった。中心となるテーマは「黒沢地区を紹介しよう」という自分の住む地域について調べるものであり、第1学年で毎年行われているものである。今年度の第1学年は男子10名、女子2名の計12名、担当教員が3名という体制である。12名を3人1組の4班に分け、それぞれが「山」「川」「店」「寺社」という小テーマを持っている。生徒はパワーポイントを用いたステージ発表と、模造紙による展示の2種類の発表準備を行う。私たちが参加し始めた10月の段階では、どの班も資料収集を完了しており、発表の準備をするという段階であった。

② 生徒らの様子

生徒らはすでに発表の内容、形式等の大枠を自分たちで決めていたようである。しかしながら、自分たちが調べたことをどのようにまとめ発表すればよいか明確になっておらず、調べたことの羅列に終始しがちであるように感じた。さらにパワーポイントや模造紙の使い方に関しても、「みやすさ」や「伝わりやすさ」といった発表の工夫や、技術的な面について経験不足が散見された。しかし、比較的他の生徒よりもパソコンの使用に慣れている生徒が見受けられ、互いに教えあう姿も確認できた。

学生に対しては、どのような支援を求めているのか、どのように接すればよいかかわからないというような状況を感じた。こちらから積極



写真1 秋香祭での発表
(筆者撮影)

的に「今、何をしているのか」「何か困っていることはないか」といった投げかけを繰り返すことで次第に打ち解けていくことができたように思う。

③ 教員らの様子

教員らは教室の中を巡回し、生徒らに声をかけ発表の準備を進めさせていた。進度の早い班に対しては発表の仕方についての提案や改善点などを、進度の遅い班に対してはまず発表資料を完成させようとする指導が多くみられたように思う。教員らの間にもパソコンの使用方法に関しては得手不得手があるようで、特定の教員が頼りにされる場面も見受けられた。

学生に対しては「子どもたちにコミュニケーションの場を提供してやってください」、「子どもたちの主体性を伸ばせるような指導をしてほしい」、「パワーポイントの使用方法など具体的な技術面に関して教えてほしい」、「なんでも話をして、困っているのなら何とか言ってやってください」、「いてくれるだけでも生徒らはうれしいようです」¹⁾という教員の言葉から感ぜられるように、指導者として、あるいは話し相手としてなど幅広い期待が寄せられていた。

④ 学生の様子

学生は、事前の資料から総合的な学習の時間の支援ということだけを知り、具体的にどのような活動をするかは実際に現地に入るまでまったく不明瞭な状態であった。時間の前後で教員

らと話をし、また教室の中を巡回する中でそれぞれの役割を見出し、どのように活動を続けていけばよいかを各自で考えていたようである。

実際の支援としては、パワーポイントの使い方や見やすい資料の作り方などのノウハウ提供のようなことが多かった。しかし、こちらからの投げかけで、新たな資料を利用し発表内容そのものについて大きく工夫を加えることもあった。

II 課題と考察

i) 教員と学生との連携

前述のように、教員から学生に対する期待は多岐に渡っていた。また、学生もどのように振る舞えばよいかを自身で考え実施することができた。

しかしこれは裏返せば、教員と学生の間で互いに、学生が教室に入り込むことの目的や役割を具体的なイメージとして共有できていない事の表れでもある。単に教室にいる人間の数が増えただけであり、より有効な連携や支援を行うことのできる関係の形成には結びついていなかったのである。現にノウハウの提供に終始しがちであったのは、これが原因の一つであると考えられる。学生の間では「どのような支援を行えばよいのか分からない」「どこまで口を出していいかわからない」²⁾といった不安を感じていたものがいたことは事実であり、このことを如実に物語っているといえる。

互いに期待することが曖昧なままであったた



写真2 活動の様子

(筆者撮影)

め、このような事態を引き起こしたものと推察される。そもそも総合的な学習の時間で何を目標しているのか、どの程度の成果を期待しているのか、互いの役割はどのように分けるのか、といった教員と学生間での情報や意識の共有が、活動に参加する前から必要であった。そうすることで総合的な学習の時間全体に対する青写真を学生と教員の間で共有でき、より積極的な働きかけができたものと考えられる。

ii) 活動における「継続性」

① 今回の活動の「継続性」

私たちが今回の活動を開始したのは10月からであった。秋香祭にむけた総合的な学習の時間としては終盤であり、期間にして約1か月、時間にすると約5時間程度と非常に短期間の活動となってしまった。これは学生と生徒・教員との間での信頼関係を結ぶのに十分な時間であったとは言い難い。活動開始当初は生徒と話をすることに時間を取られてしまい十分に学習を観察・支援することが難しいこともあった。

また、調査もほぼ終了し、まとめる段階からの参加であった。そのため発表に間に合わせる事が優先されてしまい、テーマに対し、興味関心をひきつけるような問いかけを行っても、調査する時間がなかったり生徒らの考える発表の構想うまく結びつけることができなかつたりした。

これらのことはいずれもより早い段階からの学生の参加によって解決できることである。た

例えば給食を一緒に食べるなどといった交流の時間を増やすことで、生徒らとの信頼関係を気づく時間を稼ぐことができる。また、学習開始時点から1班に1人という風に学生を配置することで、単にテーマに沿って調べるだけでなくより発展的な学習を行いやすい環境を整えることができる。少人数の学級とはいえ教員だけでは限界があることは間違いない。オーガナイザーのような役割としての学生の存在を確立し、長期的な協力を行うことで活動をより充実したものにすることができる。

また、今回の活動では週ごとに学生が入れ替わることが多く、継続的な生徒の観察・支援が行いづらい状況があった。学生の都合に依らず継続的な支援が行われるよう学生間でも情報の共有・意思の疎通が図られるべきであった。

② 研究会の活動としての「継続性」

今回の活動は研究会としては1年目の取り組みであった。そのことに起因する、連携に対する経験・ノウハウ不足が前述のような各種の課題を呼び起こした一因でもあったと考えられる。黒沢中学校は天子町の教員採用の方針に則り、新任の教員が多いという。そのため総合的な学習の時間に対する経験はもちろん、外部の協力者との連携体制づくりに対する経験が少ない教員が多いと考えられる。無論、実際の教育現場に立つことのない学生も同様である。そのような背景の中で行われる活動は、単発的であってはいけない。確固たる連携を基にした教育活動

の磨き上げが行われることが望ましい。

「変化が外側から一方的に持ち込まれたものであったり、実質を伴わず、実践者自身が今後の展開可能性についてのビジョンをもてないものであったり」³⁾すると、学校の教育というものは「変化しにくい」⁴⁾ものである。教員と学生との間で連携し、新しい教育モデルへの課題発見と実践、それに基づくモデル修正、これらの繰り返しによる実践の磨き上げ⁵⁾が行われなければならない。そのためには単年度の活動で行われるのではなく、継続した活動、それも複数年度での実施と各年度での引き継ぎや教員・学生間でのフィードバックなどが正確に行われる必要がある。

III 小括

私は今回の活動で初めて本格的に学校現場での教育支援というものに携わった。ほとんど手探りの中、毎週中学校にお邪魔し、どのようにすれば生徒にとってより良い学習になるのかについて頭を悩ませていた。短期間ではあったがその難しさを痛感する結果となり、だからこそ得ることのできたものも多かったように思う。今年度だけでなく、今後も継続して行うことで、互いのノウハウの蓄積、総合的な学習の時間の質の向上に少しでも資することができれば幸いである。

ところで大子町はとても優しく明るい方が多い町であったと思う。大子町の抱く豊かな自然のたまものなのか、はたまたそんな人々が多い環境故か、地域とのかかわりの深い学校教育のおかげなのかはわからない。しかしながらそのような豊かな環境に恵まれた町の教育に関わることができるというのはなんとも贅沢な気分である。自分の置かれた環境に感謝しながら、今後もどのようにかかわっていくことができるのか、頭を悩ませ続けたいと思う。

(小林賢司)

第3回学習支援活動

2011年11月5日～6日

11月5日(土) 大子町立さはら小学校 ・公開授業参観 ・親子ふれあいの集い(収穫祭)への参加 ・運営手伝い ・保護者懇談 大子町立黒沢中学校 ・秋香祭(総合的な学習の発表)への参加 ・保護者懇談
11月6日(日) ・佐原地区産業文化祭の見学・支援

I 活動内容と目的

私たち「地域と教育」研究会は、11月5日及び6日の2日間の日程で第3回学習支援活動を実施した。今回の活動は、大子町の小中学校で行われる「筑波大学との連携・協力推進プロジェクトに係る学力向上推進事業における体験学習」における学習サポート活動に付随して行われたものである。この連携事業のねらいは以下の通りである。

第一に、大子町の児童生徒が、体験学習による様々な経験を通して、学習に対する興味関心を高めると共に、表現力やコミュニケーション能力を育成し、児童生徒の学力の向上に資する。

第二に、大子町の児童生徒が、筑波大学の院生や学類生と交流することで、多様なものの見方や考え方を学ぶ機会とし、児童生徒の学力の向上に資する。

第三に、上記の目的を達成するために、町内各教育機関と筑波大学研究室の連携・協力体制を充実すると共に、教職員の研修を充実する。

このねらいを踏まえ、私は以下の2点を活動の目的として掲げた。

第一の目的は、それぞれの学校行事や学外活動に携わり、大子町の小中学生と交流することで、児童・生徒らの多様なものの見方や考え方の育成に貢献するとともに、学外の世界に目を向けさせるきっかけとなる。

第二の目的として、今後のさらなる継続的な関わりの中で、大子町の教育力の向上にどのような形で貢献できるかを模索する機会とする。

以下は、さはら小学校、黒沢中学校の学校行事及び佐原地区の年中行事での具体的な学習支

援活動報告である。

i) 大子町立さはら小学校での活動

ここでは、さはら小学校の年中行事の一つである「親子ふれあいの集い」に参加させていただき形で活動を行った。実施した活動は以下の通りである。

・公開授業見学

児童の調べ学習の発表を保護者が観覧する公開授業の見学。

・収穫祭における餅つき体験支援

児童らが育てた大根、白菜、もち米といった農作物の収穫を祝い、親子で取り組む調理・会食の準備支援。

・保護者懇談

会食後に座談会形式で保護者の方々にさはら小学校に関するお話を伺う。

・親子レクリエーションへの参加

親子で行うドッジボールなどのレクリエーション活動への参加。

昨年度と同様に、収穫祭の運営手伝いが活動の中心となった。さはら小学校を担当した5名の学生及び大学教員は、1、2年生担当、3、4年生担当、5、6年生担当の3グループに分かれ、餅つきや会食の配膳手伝いなどの支援を行った。①公開授業見学及び③保護者懇談は、前回同時期の調査では行わなかった新たな取り組みである。その中でも特に③保護者懇談については、PTA役員として学校行事の運営に携わる保護者の方々が、さはら小学校の現状をどう捉え、どのような組織体系のもとで活動しているのかといった佐原地区の内情を把握するための絶好の機会となった。今後の活動においても継続していくべきプログラムであると考え。

ii) 大子町立黒沢中学校での活動

ここでは、黒沢中学校の総合的な学習における調査結果の発表会である「秋香祭」に参加させていただき形で活動を行った。実施した活動は以下の通りである。

・ステージ発表見学

児童の調べ学習の見学。総合の時間の発表と主張発表が行われた。

・学生による発表

「黒沢中の良いところを再発見しよう」というテーマで学生の出身校と黒沢中を比較し、パワーポイントと模造紙による発表を行った。

・保護者懇談

秋香祭終了後に会議室にて座談会形式で保護者の方々にお話を伺う。(人数確認できず)

「秋香祭」は普段の学習の成果を発表する場であり、保護者や地域の方が多く見学に来られる。また、上記の他にも全校生徒による合唱やバザー、家庭教育学級(家庭での教育を推進する取り組み?)の一環としてプロの朗読家を招いた「親子朗読コンサート」も行われた。懇談会での様子から、毎年楽しみにしている方が多いことが窺われた。

iii) 佐原地区産業文化祭での活動

奥久慈茶の里公園で開催された佐原地区産業文化祭では、農産物・リサイクル品展示即売、歌謡ショー(よさこいソーラン 茶の里音頭の踊り)、カラオケ大会、フラダンス、スリッパ飛ばし大会、抽選会などのイベントが行われたほか、4、5店舗ほどの出店が出された。

ここで実施した活動は以下の通りである。

・母親会「ハッスルママの会」の出店支援

佐原地区の母親会である「ハッスルママの会」が出す出店を仕込みの段階から支援。担当した業務は、餃子・フライドポテト・けんちん汁の調理、釣銭の管理、呼子である。

・さはら小学校の野菜販売支援

さはら小学校の児童らが前日に収穫した自分たちが育てた野菜・餅の販売手伝いの支援。

・文化祭主催者、協力者に対するインタビュー
文化祭の主催者、協力者の方々に、文化祭に関するインタビュー調査を実施。

母親会「ハッスルママの会」の出店手伝いが中心となったこの日の活動では、初の試みとな

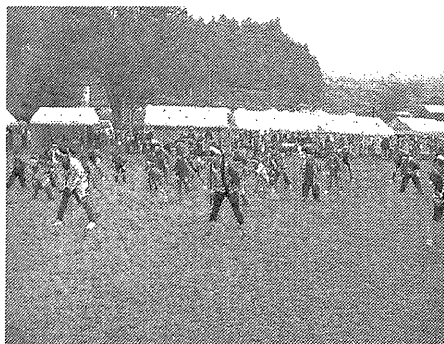


写真3 佐原地区産業文化祭で
よさこいソーランを披露する佐原小の生徒ら
(筆者撮影)

った文化祭主催者、協力者へのインタビューを含め、佐原地区の住民の方々との積極的なコミュニケーションが図られた。その中で、ハッスルママの会のメンバーの方々との間で来年度筑波大学学園祭への出店の話が持ち上がったことは大きな収穫である。

II 感想と考察

今回の活動全体に言える課題として挙げられるのは、学生が「お客様」であり過ぎたという点である。特にさはら小学校での活動においてそれは顕著であり、ただ見ている、という時間が長く、受け身の姿勢で指示待ちの状態になっている場面が多くみられた。そうってしまった要因の一つとして、学生側の受動的な参加形態が挙げられる。全てが用意されたイベントに放り込まれるだけでは、学生らもどこまで能動的に動けば良いのか、どの場面で積極性を発揮すべきなのかといったことの完璧な把握は難しい。その結果が今回のような指示待ちの姿勢につながったのではないかと考える。これでは、冒頭の活動内容と目的の中で掲げた第一の目的「それぞれの学校行事や学外活動に携わり、大子町の小中学生と交流することで、児童・生徒らの多様なものの見方や考え方の育成に貢献するとともに、学外の世界に目を向けさせるきっかけとなる」の達成もほど遠い。2日間の活動で抱いた感想としては、「ただ餅つきを手伝っただけ」であり、もっと言えば「ただ何となく楽しかっただけ」である。これでは、「大学生」と

して、今回の連携事業に参加した意味は見出せない。

この反省を踏まえ、今後の大子町との連携事業をより良いものとしていくためにはどうすればよいのか。私は、学生は学生だからこそ担える役割を持つことが重要であると考え。具体的な案を挙げるとするならば、今回のさはら小学校の収穫祭であれば、学生が餅つき大会を取り仕切るMCとなつて、餅つきや会食の中に野菜や餅に関するクイズを挟み込こむ、または餅の「早丸め大会」のようなゲームを開催するなどが挙げられる。

このような役割を担うためには、イベントの計画段階から運営に携わる必要がある。そういった場で、学生ならではの視点で新たな風を吹き込むことこそが、大学生ができる大子町との「協働」の形ではないだろうか。また、大学生が前に立って主体的な取り組みを見せることは小中学生に刺激を与えることにもつながる。これは、先述の第一のうち「外の世界に目を向けさせるきっかけとなる」の達成に通じるだろう。

III 活動から見た今後の課題と提案

現地での活動における学生の感想や意見を踏まえて、今後の課題と活動における提案を示唆する。

さはら小学校の「親子ふれあいの集い」では親同士の中の良さが見受けられ、地域の人たちが普段から気兼ねなく関わっているように感じられる。そういった中でも、取り組みに積極的

でない保護者や、自分の順番以外のところでは友達同士で遊ぶ児童が、少数派ではあるが見られたという報告があった。「親子ふれあいの集い」は、「毎年春から秋にかけて子どもたちが行ってきた農業体験活動（田植え、稲刈り、脱穀、野菜栽培など）でとれた作物を材料として、親子で餅つきや豚汁作りを行い、会食を通して収穫の喜びや携わっていただいた多くの方々に感謝する」⁶行事である。この行事には、収穫した作物を味わうことで農業の素晴らしさや食物の大切さを学ぶこと、親子で調理することで触れ合いを高めること、会食を通じて地域の人と触れ合うことという目的が内包されている。つまり、子どもを対象にした取り組みというわけではなく、地域全体を対象とした取り組みであると考えられる。そのため、学生から生じた疑問は「親子ふれあいの集い」の目的の不明瞭さから生じた一つのズレである。改善策として、最初に明確な目的を提示することが一つの手段であると考えられる。また、目的の明確化に加えて重要なことは、実際に関わった地域の人々が行事を通してどのように感じているのか、考えているのかを運営側や学生たちが知る必要があると思われる。その方法として、行事中にインタビューを実施する、事後のアンケート調査を行うことなどが挙げられる。これは、本学生が協力して行うことが可能である。実際の活動参加者から得られた感想を基に、地域の人々が必要としている活動を把握し、目的を再検討していくことで「親子のふれあいの集い」はより一層、充実した行事として取り組まれるであろう。また、本学生が今後継続的にどのように活動にかかわっていくかを検討するための、足掛かりとなるのではないだろうか。

黒沢中学校の「秋香祭」の生徒による発表では、発表の内容や方法に学年の特徴が出ていた。1年生の緊張感溢れる発表や3年生のユニークな発表など、学年間で多少の差はあるものの、生徒の生き生きとした表情がたくさん見られた。また、教師や保護者の表情も和やかであり、地域と学校の一体感が感じられた。なぜ、一体感が感じられたのだろうか。その一つの要因とし

て、「少人数」ということが考えられる。今回の取り組みの中で、「少人数」の素因となるものは教師・生徒・地域の規模が考えられる。「少人数」であることのメリットとデメリットの両者が、秋香祭での様子やインタビューからも出てきている。例えば、少人数の生徒であることから、教師との距離が近いということは保護者にとって指導の目が行き届きやすいと思われ、安心されるメリットの面が見られる。しかしながら、少人数の生徒であることから相互教授の機会は減り、学習への意欲が高まらないのではないかと危惧されるデメリットの面もある。こうしたデメリットのいくつかは改善していく必要がある。デメリットとして上がってきたことの一つ目は、生徒の競争心の低さである。少人数規模の学校ではしばしば起こりうる問題であろう。いつも同じメンバーの中で順位を争うことは、難しいだろうし、意欲を失ってしまうかもしれない。しかしながら、競争心は教師の指導の工夫で高めることはできる。集団が小さくても、競い合う機会を設けたり、一定基準を提示したりすることで競争することは可能である。二つ目は、教師の能力差である。総合学習では学生によるパソコンの指導や発表のノウハウの提供が多かったとあった。それは、技能的指導が担当した教師にとって苦手とする分野であることを示唆しているのではないだろうか。では、学生がいなかったらどうしたのであろうか。授業には3人の教師が関わっている。そのため、それぞれの教師が得意とすることを活かして、生徒に提供していくことが有効である。何を調べるのか、どのように調べるのか、どのように発表するか、ということは生徒の主体性から派生するものであり、またそれは生徒の「考える力」を育てることになる。つまり、技能的指導を行うことだけでなく、発表方法などを自ら考えさせる指導が必要になる。こうしたメタ認知を促す指導方法が、これからの「生きる力」を育てることができると考えられる。

学生は一時的な外部関与者であるが、教師は継続的な内部関与者である。その違いと特性を踏まえて、今後「総合学習」をどのように協同

し、展開していくかを考えていく必要がある。

最後に、今回の調査で学生の多くが感じたことは、地域のコミュニケーションの充実さである。それに伴い、地域の「幸福度」は高いように感じられた。過疎化が進み、若者が少なくなると不安だという声もあるが、そういったことを改善することと幸せは繋がるのであろうか。教育も同じで、例えばどんなに優れた学習をしても幸せになるとは限らない。ただ、一つ言えるのは、幸せを感じる場所に人は必ず訪れるのだと思う。その一つが、地域の人々が幸せそうにしていることであろう。笑みが溢れ、隣近所と分け隔てなく関係する、心豊かな場所であると私の目には映った。今度も、そのような「幸福の場所」を築いていってほしいと思う。そして、私たち学生が外部者としてできることは、幸せの再確認である。地域の特性や特色、つまり良さということは内部者側からだけでなく、外部者側から気づくこともできる。連携している中

で、地域の人々が気付かなかった「地域の良さ」を外部側から見て再発見することが可能である。内側からの視点と外側からの視点を共有し、確認作業を行っていくことで見えてくる「地域の特性」があるだろう。今後はそのような取り組みも課題として提案したい。

(酒井大二郎・森芸恵)

注

¹⁾ 授業前後での教員(校長、教務主任、第1学年主任・担任・担当)との会話より。

²⁾ 活動後の学生に対する聞き取り調査より。

³⁾ 保坂裕子「教師チームの総合カリキュラム開発にみる拡張的学習-コラボレーションとネットワーク-」『日本教育方法学会紀要』第29巻、2003年。

⁴⁾ 同上。

⁵⁾ 保坂(2003)はこのサイクルを、発展的ワークリサーチを基にした拡張型学習のサイクルと表現している。

⁶⁾ 「大子町教育ポータルサイト」

(<http://www.daigo.ed.jp/>) 2012年3月25日閲覧。